平成21年度文部科学省大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム選定事業
乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現

長野県上田市における
集約的保育者養成ニーズを反映した保育者養成に関する研究
―集約的保育者養成ニーズの把握―
報告書

上田女子短期大学
信州大学

はしがき

上田女子短期大学幼児教育学科と信州大学教育学部は、それぞれ保育者養成・教員養成の使命を担う者同士として、互いに連携を深めながら、これまで数多くの事業を協同で展開してきました。本報告もその一環であり、長野県上田市における保育者養成ニーズを調査・検討したものです。

報告にもあります通り、これまで保育者養成ニーズについては、養成校が持つ観点、保護者からの観点、幼稚園・保育所すなわち現場サイドの観点は研究がなされてきましたが、それらを相互に摺合せながら集約的に検討した研究は充分に為されてきたとは言い難い状況にあります。本報告はまさにその点を明らかにしております。

保育者養成・教員養成に日々勤しみ学生と向き合っていると、彼・彼女等が学生生活や実習を通して成長していく姿が感じられ、そこに養成校の教員としての喜びもあるわけですが、多角的な視点やニーズを総合的に参照することで自らの教育行為も一層の改善がもたらされます。この研究報告を通して、ご覧になられるすべての方におかれましても今後更なる教育の充実が図られることを願っております。

実施本部長　小　川　　史（上田女子短期大学）

調査研究担当者一覧

部会等	氏　名		所　属　等		
FD・SD部会	笹　井　　弘	○	上田女子短期大学	幼児教育学科	教授
	兎　束　淑　美		上田女子短期大学	幼児教育学科	教授
	長　田　真　紀		上田女子短期大学	幼児教育学科	教授
	浜　野　兼　一		上田女子短期大学	幼児教育学科	専任講師
	小　野　智　明		上田女子短期大学	幼児教育学科	専任講師
	村　松　浩　幸	○	信州大学教育学部	生活科学教育講座	准教授
	島　田　英　昭		信州大学教育学部	教育科学講座	准教授
	髙　柳　充　利		信州大学教育学部	教育科学講座	助教
地域連携部会	市　東　賢　二	○	上田女子短期大学	幼児教育学科	准教授
	島　﨑　あかね		上田女子短期大学	幼児教育学科	准教授
	平　澤　節　子		上田女子短期大学	幼児教育学科	専任講師
	小　池　浩　子	○	信州大学教育学部	言語教育講座	准教授
	越　智　康　詞		信州大学教育学部	教育科学講座	教授
	平　野　吉　直		信州大学教育学部	スポーツ科学教育講座	教授
	徳　井　厚　子		信州大学教育学部	言語教育講座	准教授
	鈴　木　俊太郎		信州大学教育学部	附属教育実践総合センター	准教授
戦略GP連携コーディネータ	橋　本　一　雄		上田女子短期大学	幼児教育学科	助教
	安　達　佳与子		信州大学教育学部	プロジェクト等（戦略GP）	専門職員（GP）
戦略GP事務補佐員	橋　詰　聡　美		上田女子短期大学	GP推進室	事務補佐員
	藤　原　友紀子		信州大学教育学部	GP事務室	事務補佐員

※○は部会長

長野県上田市における
集約的保育者養成ニーズを反映した保育者養成に関する研究
―集約的保育者養成ニーズの把握―

信州大学教育学部附属教育実践総合センター　鈴　木　俊太郎
上田女子短期大学　橋　本　一　雄
信州大学教育学部　髙　柳　充　利
信州大学教育学部　安　達　佳与子
戦略GP FD・SD部会
戦略GP地域連携部会

概要

本研究は長野県上田市における集約的保育者養成ニーズを明らかにし、保護者や園児の高い利用者満足が得られる保育者養成課程を構築することを目的に計画された。本研究は全体として、①大学・現場職員・保護者・園児の求める保育者像を明らかにする（地域連携部会）、②現在の学生の資質を照らし合わせ改善策を講じる（FD・SD部会）、③学生たちの就職後の評価、という3つの研究を段階的に行なうこととした。これにより地域固有性を備えた有力な人材が輩出され、上田市の子育て環境に大きな貢献をすることができると言えよう。特に今回は①の段階に焦点を絞り、集約的保育者養成ニーズを把握するため質問紙形式を実施した。結果、「保育に関する基本技能」、「保育業務への意欲」、「精神的打たれ強さ」、「仕事への愛着」の4因子が養成ニーズの下位因子として明らかになった。先行研究、並びに予備調査から得られた予想通り、単純な保育に関する知識・技能のみならず、子どもへの愛着や仕事への動機づけ、ストレス耐性といったものが、上田市の保育者として必要であると考えられていることが示された。

1．はじめに

1-1　問題と目的

本研究は高等教育機関における保育者養成研究の中に位置づけられる。この領域における先行研究は多数蓄積されてきているが、大きく分類すると以下の3種類に分けられる。

第一に、教育する側である高等教育機関が提案する保育者養成のあり方に関する研究が存在している。ここでは、①保育に携わる者としての専門性・資質を幼児教育という学問的枠組みから定義しその必要性を考察した研究（「保育者はその養成過程で何を学ぶべきか」に関する研究）、②教育カリキュラムの中でその専門性・資質向上を実際に引き上げるための研究（「保育者養成過程における授業の効果測定研究」）がこれまでの主たる研究テーマとなっていた。また、③特別なニーズのある子どもへの援助方法を模索する研究が、2000年代に入ってから論文の件数として増えつつあることも特徴といえよう。専門学校や短大、大学といった教育機関において、どのようなことを、どのように教えるべきかという研究が、これらの先行研究で共通して見られる問

題意識と言えよう。

第二に、利用者側である保護者が保育者養成に関してどのようなニーズを持っているかを明らかにする調査研究が存在している。保護者が期待する保育内容、保育者への満足感、保育制度に関する満足感などが調査の対象となり、これまで多くの短大・大学でアンケート調査が実施されてきた。これらの研究ではアンケート調査における自由記述を質的な分析で検討する手法や、統計的手法で実証する手法など、さまざまな方法が用いられてきた。

第三に、保育者を雇用し、同僚として働く現場サイドから保育者養成に関してどのようなニーズを持っているかを明らかにする研究が存在している。ここでは①雇用する側からのニーズ、②現場で同僚として一緒に働くものとしてのニーズの２種類の調査研究が見られ、①、②間で必ずしも高等教育機関に求める保育者像が一致していないことも注目すべき結果であると言えよう。

以上のように、保育者養成に関する研究は、保育者と関わることになる異なる立場から理想とする保育者像が提言され、議論されてきた。しかしこれらの研究を俯瞰すると、それぞれの立場からのニーズや理想が語られるものの、互いに理想とする部分のすり合わせが十分に行なわれているとは言えず、単に知識として求められる保育者像が提示されている点は否めない（図１参照）。

さらにこれらの研究成果が実際の保育現場に生かされるためには、それぞれの立場のニーズをすり合わせ、共通点や相違点を見出し、現在求められているものの中でも最大限の妥協と実用性が見出せるような保育者像を作り上げる必要がある。これを本研究では集約的保育者養成ニーズと呼ぶこととする（図２参照）。そしてそのような保育者像を提示するだけにとどまらず、実際に教育現場で保育者像実現のための方策を実施し、十分な能力・資質を身につけた保育者を現場に輩出し、現場で働く中で地域の保育環境が良くなったかどうかを評価するという一連のサイクルが出来上がってはじめて、研究成果が社会に還元されたと言える状態となる。

以上の点から本研究は、保育者養成研究の中でもとりわけ集約的保育者養成ニーズに着目し、それを明らかにするだけではなく、教育の場にそのニーズを取り入れ、現場や利用者に還元するというサイクルを想定した大学と地域の協同研究といえる。

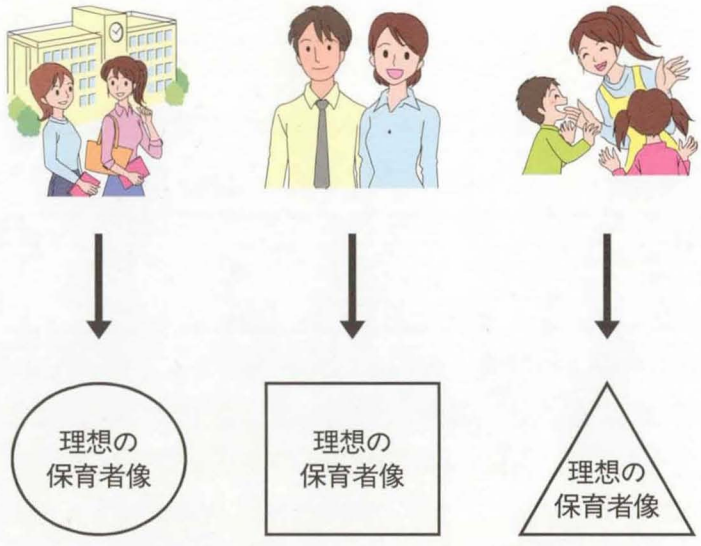

図１　先行研究で明らかにされてきた理想の保育者像

図２　本研究が扱う集約的保育者養成ニーズ

1-2　プロジェクト全体における本研究の位置づけ

■　集約的保育者養成ニーズの把握

第一に、高等教育機関、現場サイド、利用者サイドの保育者養成関係者に対して調査研究を実施し、集約的保育者養成ニーズを明らかにする。それぞれの対象に対して聞き取り調査を実施することで作業仮説を構築しニーズ調査用の質問紙を作成する。その上で収集されたデータに対して因子分析的手法で要因抽出を行い、集約的保育者養成ニーズが客観的に測定できる尺度も同時に開発する。

■　集約的保育者養成ニーズの養成カリキュラムへの反映とその効果測定

第二に、集約的保育者養成ニーズを上田女子短期大学の養成カリキュラムへと反映し授業改善を図る。その上でこのプロセスの効果測定を行なう。具体的にはニーズを繁栄したFD活動や授業の改善をそれぞれの科目で実施し、学習者のニーズ達成度の変化、保育者自己効力感などを測定する。

■　養成カリキュラム修了後の保育者への評価を測定

第三に、養成カリキュラムを修了し現場に職員として配置された学生たちの就職後の評価を行なう。過去に輩出されてきた学生が初年度～新人期間であった場合と比較して、カリキュラム修了後の新任の学生たちがどの程度集約的保育者養成ニーズを満たしているか、現場サイド、利用者サイド、高等教育機関からそれぞれ評価していくという作業を行なう。この評価によって、さらに第一段階の集約的保育者養成ニーズの把握、第二段階の養成カリキュラム改善へのフィードバックを行なう。

上記の３段階をプロジェクト全体では計画している。

本研究ではこのうち、第一段階にあたる、「集約的保育者養成ニーズの把握」を目的に計画された。

2．予備調査

2-1　目的

高等教育機関や現場サイド、利用者サイドでニーズが異なるという先行研究の結果が、長野県上田市という地域においても成立することを確認する。

2-2　方法

対象　保育園長２名、上田市において保育者養成を行う高等教育機関の教員２名。

手続き　対象に対して、①自身が持つ保育者の理想像について、②上田市でこれまで（過去）必要とされていた保育者の技能や特性について、③上田市で現在必要とされている保育者の技能や特性について、④上田市で今後（未来・将来）必要とされる保育者の技能や特性について、という４つの観点を聴取するため、インタビュー調査を行った。インタビュアーは本研究の企画・立案を担当している研究者が務めている。この研究者は自身の研究テーマとしてグループ討論を取り上げており、ファシリテーターとしての経験が十分な者であった。

2-3　結果

保育園園長、そして上田市において保育者養成を行う高等教育機関の教員への予備調査でのインタビュー結果をすべて書き起こし、言及されている「必要な技能や特性」についてマーキングを施し、類似の項目についてKJ法により分類、整理した。

この結果、これまでのニーズ調査でも同様に指摘されてきた共通して必要とされるニーズ（「保育内容に関する技能」「保育内容に関する知識」）が示される一方、現場で特に最近必要と感じるニーズだが、大学教員からは積極的に提出されなかったニーズ（「やる気」、「コミュニケーション能力」、「小学校との連携構築能力」、「接遇・マナー」、「外国籍児童・母親への対応力」）が示された。特に、保育園長として重要だと感じる素養として「コミュニケーション能力」と「接遇・マナー」が、また高等教育機関教員側からは「保育内容に関する知識」が、数多く挙げられる結果となった。

2-4　考察

上田市という地域において、独特な保育者養成ニーズが存在するということがまず明らかになった。大都市や中核都市のような人口の多い地域での保育と、郊外都市での保育には、文化、経済などの面から差異が生じ、そこを利用、運営する側からも独特な素養の必要性が挙げられるにいたったと考えられる。

また、調査対象（高等教育機関か、現場サイドか、利用者サイドか）が異なることによって、必要と感じる保育者の資質・能力はやはり異なることが明らかとなった。これは、その対象から見て、保育者が「学生」であったり、「同僚」であったり、「先生」である（つまり、保育者への対人認知が異なる）ため、そこに必要と感じるものが異なるのではないかと予想される（たとえば、「恋人」ならば普通に備えていて欲しい部分でも「友達」には求めないなどということがあることと同様と考えられる）。

3．本調査1

3-1　目的

集約的保育者養成ニーズを質的研究から明らかにし、その後の測定ツール開発のための項目材料収集を行う。

3-2　方法

対象　保育園長4名、現役保育士30名、保護者49名、保育者養成の高等教育に携わる教員8名。

質問紙　質問項目は、①フェイスシート（年齢、性別、所属、勤続年数）、②「上田市で保育にたずさわる保育者にとって大切だと思われる資質・能力とはどのようなものが思い浮かびますか。あなた自身のお考えを以下の記述欄に思い浮かんだだけ全てお書きください。箇条書き、文章、どちらでも構いません。」という質問項目と自由記述回答欄、③この調査・研究に関しての自由記述」、以上3項目を提示した。

手続き　まず、調査について説明、並びに了解を得るため、研究企画を中心的に担当している研究者、ならびに上田女子短期大学学長らで事前に上田市役所を訪問し、調査の許可を得た。その上で、質問紙調査を実施した。質問紙は園長会などを通じて郵送、直接配布などの手段を用いて配布することで調査を依頼し、回答を求め、回収を行った。

分析方法　上記質問紙の②の項目について、得られた質的データをスクリプト化し、QDA法によって要因分析を実施した。

インタビュー　保育者養成の高等教育機関に携わる教員に関しては、インタビュー調査を実施した。これは質問紙に準ずる形で直接意見を聴取する形式で実施した。

3-3　結果

QDA法による要因分類を行った結果、上田市における集約的保育者養成ニーズとして、以下4つの上位因子、並びに10の下位因子が抽出された。本分析の結果を、図3に示す。

「興味関心」は、「子どもへの愛着」、「仕事への愛着」という2因子から構成されている。「子どもへの愛着」は、子どもに対して興味関心を持っている、子どもを見てかわいいと感じる、子どもに対して恐怖心を抱かない、子どもが嫌いである（逆転項目）、など保育の対象としての子どもへの愛着が形成されているかを示す項目が中心となって構成されている。「仕事への愛着」は、仕事が楽しい、仕事に充実感を感じる、理想とする仕事である、この仕事は長く続けられそうにない（逆転項目）、など保育者としての業務全般への愛着が形成されていることを示す項目が中心となって構成されている。

「人格」は、「優しさ」、「誠実さ」、「快活さ」、「粘り強さ」という4因子から構成されている。「優しさ」は、子どもに対して優しさをもって接することができる、保護者に対して優しさをもって接することができる、同僚に対して優しさを持って接することができる、きつい言動が目立ってしまう（逆転項目）、など保育業務中に接する人間に対して親切心をもって接することができる素養の形成について言及する項目が中心となって構成されている。「誠実さ」は、業務には真剣に取り組むことができる、努力は惜しまないタイプだ、仕事のために偽りの自分を作っている（逆転項目）、お金のために我慢して仕事をしている（逆転項目）、など真面目で真摯な業務態

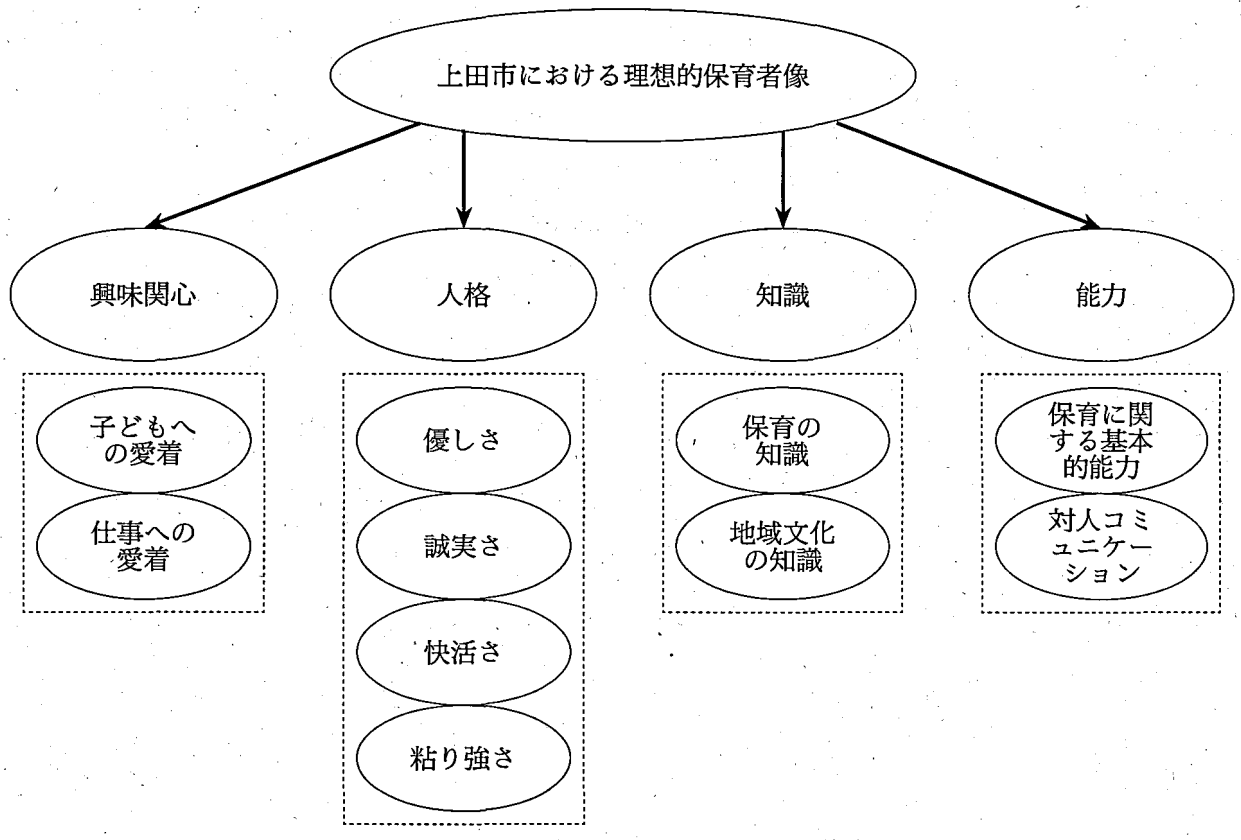

図3　QDA法により得られた集約的保育者養成ニーズ

度について言及する項目が中心となって構成されている。「快活さ」は、元気がよい、あいさつがきちんとしている、物事をポジティブにとらえがちだ、物事をネガティブにとらえがちだ（逆転項目）、などエネルギッシュで前向きに物事を考えられるかどうかについて言及する項目が中心となって構成されている。「粘り強さ」は、ミスをしてもすぐに気持ちの切り替えができる、注意されても落ち込まずに前向きにとらえられる、仕事は責任を持って最後までやり通す、仕事中に叱られることが怖い（逆転項目）、など失敗からの回復やストレス耐性について言及する項目が中心となって構成されている。

「知識」は、「保育の知識」、「地域文化の知識」という2因子から構成されている。「保育の知識」は、保育に関する基本的知識を習得している、子どもの好きな遊びや歌などに詳しい、子どもの心身の発達について知識を持っている、保育に関する書籍を読まない（逆転項目）、など保育者としての基礎的知識、宣言的記憶の部分に言及する項目が中心となって構成されている。「地域文化の知識」は、上田市の地理についてよく知っている、上田市の歴史や伝統行事についてよく知っている、上田市での生活に慣れている、上田市の祭りや行事をよく知らない（逆転項目）、など、上田市という地域に限定されるような文化やしきたりについての知識に関して言及する項目が中心となって構成されている。

「能力」は、「保育に関する基本的能力」、「対人コミュニケーション」という2因子から構成されている。「保育に関する基本的能力」は、保育に関する基本的技能を習得している、子どもと一緒に遊ぶことに抵抗がない、園のお祭りを率先して企画・担当できそうだ、保育場面で自信を持ってできない（逆転項目）、など手続き的知識、経験としての保育業務、ならびに保育業務

への自己効力感について言及する項目が中心となって構成されている。「対人コミュニケーション」は、子どもと円滑にコミュニケーションが取れる、保護者と円滑にコミュニケーションが取れる、同僚と円滑にコミュニケーションが取れる、他国籍の子供とのコミュニケーションが取れる、など他者とのコミュニケーション能力、人間関係構築能力について言及する項目が中心となって構成されている。

以上、4つの上位因子、10の下位因子についてその概要を述べた。

3-4 考察

本調査1から得られた集約的保育者ニーズ項目は、教育者側が大学や専門学校での習得を期待する知識や技能といった側面だけではなく、人格的な側面、仕事への動機づけといった側面も網羅しているものであった。

保育業務は人とのかかわりを前提としたものである。子どもとのかかわりは当然のことながら、それを取り巻く保護者や同僚、他機関の職員といったさまざまな年齢層、所属の人間とのかかわりが要求される仕事と言える。このような現場では、精神的な健康度はもちろんのこと、他者とのつながりを重視し、チームワークを持って接することができる人材が求められているということがこの質的調査からは明らかになったと言えよう。

本調査2では、この結果を踏まえ、質問項目を整理し、集約的保育者ニーズを測定するためのツールを開発していく。

4．本調査2

4-1 目的

集約的保育者ニーズを一定の客観性をもって測定するためのツールを開発し、上田市において期待される保育者像を明らかにする。

4-2 方法

対象 園児の保護者51名、園長33名、園の常勤職員50名。

質問紙 質問項目は、本調査1を基盤に整理された「上田市における保育者養成ニーズ測定尺度」の42項目であった。この項目の内訳は、本調査1で抽出された10の下位因子からそれぞれ代表的な項目を4項目ずつ（計40項目）に加え、外国籍児童・生徒の援助にあたっている専門家が地域の実情を考慮して必要性を判断した2項目である。

手続き 上田市に調査を依頼し、本調査1と同様の手続きを持って質問紙調査を行った。

4-3 結果

因子分析前に、回答の偏りを防ぐため、天井効果、床効果の確認を行ったところ、すべての項目がこれに該当しないことを確認できた。よって、全42項目に関して分析を行うこととした。

主因子法による因子分析の結果、第4因子までが固有値1以上の値である点、スクリープロットの落ち込みが観測される点、累積寄与率が60％を超える点などを考慮し、4因子構造が妥当であると判断された。そこで再度4因子を仮定して主因子法、Promax回転による因子分析を行

った。結果、十分な因子負荷量（.50以上）を示さなかった13項目を除外し、項目選定を行った。採用された29項目について、再度主因子法、Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表１に示す。なお、回転前の４因子で29項目の全分散を説明する割合は68.91％であった。

第１因子は14項目で構成されており、「子どもと一緒に遊ぶことに抵抗が無い」、「子どもと円滑にコミュニケーションが取れる」、「保育に関する基本的知識を習得している」など、保育業務の基本ともいえる技能に関しての項目が高い負荷量を示していた。そこで、「保育に関する基本技能因子」と命名した。

第２因子は10項目で構成されており、「業務に真剣に取り組むことができる」、「仕事は責任を持って最後までやり通す」、「子どもに対して興味・関心を持っている」など、保育業務そのものへの動機づけや意欲に関しての項目が高い負荷量を示していた。そこで、「保育業務への意欲」因子と命名した。

第３因子は２項目で構成されており、「ミスをしてもすぐに気持ちの切り替えができる」、「注意されても落ち込まずに前向きにとらえられる」という、失敗からの気持ちの切り替えがいかにスムーズにできるかに関しての項目が高い負荷量を示していた。そこで、「精神的打たれ強さ」因子と命名した。

第４因子は３項目で構成されており、「仕事のために偽りの自分を作っている」、「お金のために我慢して仕事をしている」、「物事をネガティブにとらえがちだ」という、仕事そのものにどの程度愛着を持っているかに関する項目が高い負荷量を示していた。そこで、「仕事への愛着」因子と命名した。

これらの各因子について、クロンバックの α 係数を算出したところ、全体で $\alpha=.76$、第１因子で $\alpha=.80$、第２因子で $\alpha=.72$、第３因子で $\alpha=.72$、第４因子で $\alpha=.73$であり、内的整合性が確保されていると考えられる。

4-4　考察

本調査１の段階で想定されていた４つの上位因子とは異なるものの、本調査２では想定されていた因子が組み合わされることで新たな下位因子として再構成された。

第１因子「保育に関する基本技能」は、本調査１で想定していた「知識」と「能力」に分類されていた項目を併せた下位尺度であると考えられる。保育業務では、宣言的な知識をベースとしつつ、手続き的な記憶に基づく業務動作が求められる。このため、知識と技術は相互に密接な（不可分な）ものとして存在しており、二つの因子項目が統合される形となったと考えられる。

第２因子「保育業務への意欲」は、第１因子同様本調査１で想定していた「興味関心」と「人格」に分類されていた項目を併せた下位尺度であると考えられる。「興味関心」の項目の中でも、仕事に対する動機づけの側面を記述した項目が多く分類され、さらに「人格」項目からも明るさ、積極性を記述する項目が多くみられている。この下位尺度では意欲という側面を重視する項目が集約されたと考えられる。

第３因子「精神的打たれ強さ」に関しては、本調査１で想定していた「人格」因子の中でも、とりわけ失敗からを前向きにとらえて切り替えられるかどうかという項目が分類された。予備調

表１　「上田市における保育者養成ニーズ測定尺度」の因子分析結果（Promax 回転後）

項目内容	因子負荷量			
	1	2	3	4
Q32　子どもと一緒に遊ぶことに抵抗が無い	.91	.24	.23	.05
Q25　子どもと円滑にコミュニケーションが取れる	.91	.35	.29	.07
Q30　保育に関する基本的知識を習得している	.90	.38	.40	.17
Q31　保護者に対して配慮を持って接することができる	.90	.41	.25	.03
Q38　子どもの心身の発達についての知識を持っている	.87	.36	.35	.14
Q34　すぐに批判的にならずにまず事実を知ろうと努める	.87	.43	.38	-.04
Q27　同僚と円滑にコミュニケーションが取れる	.86	.32	.48	.03
Q33　保育に関する基本的技能を習得している	.85	.36	.33	.21
Q26　元気が良い	.80	.20	.28	.03
Q36　上田市での生活に慣れている	.77	.13	.44	.31
Q39　仕事を長く続けられそうである	.75	.27	.58	.15
Q37　文化の違いを知ることに関心がある	.72	.24	.45	.22
Q20　同僚に対して優しさを持って接することができる	.60	.14	.20	.06
Q23　物事をポジティブにとらえがちだ	.53	.03	.41	.08
Q 5　業務に真剣に取り組むことができる	.28	.89	.38	-.12
Q11　仕事は責任を持って最後までやり通す	.33	.88	.34	-.08
Q 1　子どもに対して興味・関心を持っている	.24	.76	.16	-.30
Q16　努力は惜しまないタイプである	.35	.73	.56	-.07
Q 3　理想とする仕事に従事している	.20	.72	.34	-.38
Q 9　保護者と円滑にコミュニケーションが取れる	.43	.72	.34	-.25
Q 7　仕事が楽しいと感じている	.24	.70	.35	-.28
Q 6　園の行事を率先して企画・担当できる	.35	.68	.57	.10
Q13　子どもに対して優しさを持って接することができる	.22	.67	.12	-.35
Q35　子どもに対して嫌悪感を抱いている	.01	-.56	-.07	.41
Q17　ミスをしてもすぐに気持ちの切り替えができる	.37	.40	.77	-.14
Q 4　注意されても落ち込まずに前向きにとらえられる	.26	.38	.75	-.13
Q22　仕事のために偽りの自分を作っている	.06	-.44	-.16	.67
Q29　お金のために我慢して仕事をしている	.03	-.45	-.14	.67
Q14　物事をネガティブにとらえがちだ	-.32	-.24	-.32	.58
因子間相関	1	2	3	4
1	—	.34	.41	.13
2		—	.39	-.24
3			—	.08
4				—

査の段階で行ったインタビューからも、ストレス耐性の重要性が園の関係者から指摘されている通り、保育者にとって安定した業務を支える重要な素養と考えられる。ただし、この下位尺度項目数が2項目と少ない点は問題であり、信頼性や妥当性の検証が今後必要となるだろう。

第4因子「仕事への愛着」は、本調査1で想定していた「興味関心」因子の中でも、とりわけ仕事に対する誇りや愛着といった側面を記述した項目が分類される結果となった。自分自身に対してどの程度愛着や好感、自信を持っているかということに関して、自尊心という概念が提出されている。仕事に対して抱く自尊心のようなものが、この因子には反映していると考えられよう。ただし、ここでも第3因子同様の問題が存在しているため、今後検討が必要な部分であるといえる。

5．まとめとして

本研究では上田市における保育者養成のニーズ把握のため、予備調査を含めた3つの調査により集約的保育者養成ニーズを明らかにした。その上で、統計的に一定程度の妥当性と信頼性を備えた尺度開発を行い、集約的保育者養成ニーズを測定することが可能となった。

本研究は、長野県上田市で働く保育者を養成する課程を抱える高等教育機関に対して、その人材育成の一つの目安となる指標を提供できたことに大きな意義があるといえよう。大学や短大、専門学校等の機関では、独自のディプロマポリシーに従い、教育課程やカリキュラム、教員配置を考えることが一般的である。しかしこれに加え、地域住民の声を反映させて、大学教育の質の向上と現実への適応向上を図るという試みは、非常に重要であるといえよう。

今後の課題として、集約的保育者養成ニーズと今回開発した尺度を参照しつつ、養成校のカリキュラム編成を行っていく必要があるといえよう。あくまで今回の研究で明らかとなったのは、市民がどのような保育者を期待し、切望しているかという点であり、今後はこの希望に沿った人材をいかに育成していくかという段階が現実には求められていると考えられる。

また、今回測定されたニーズは、あくまで現段階の上田市という地域でのニーズであり、時代背景、経済状況などにより、このニーズは刻々と変化する可能性が存在する。このため、今後適切な時期にこのニーズ調査を見直し、状況に即した教育カリキュラムを設定しなおす必要が出て来るといえよう。

＊なお、当調査項目の検討は、鈴木・橋本・高柳・安達（佳）を中心にFD・SD部会ならびに地域連携部会にて行った。また、調査票の配布・回収は上田市保育課のご協力のもと、橋本を中心に行い、データの分析及び報告書の執筆は鈴木が行った。

おわりに

上田女子短期大学と信州大学教育学部は長野県の上田市、長野市という隣接する地方都市にあって、それぞれがより良い保育や教育を担う地域人材を育てようと個別に努力を重ねていました。この度、この助成を得ることができ、初めて両教育機関が連携して研究や教育に当たるという機会を得ました。幸い両方の大学の間に架け橋となる人材が存在したため、プロジェクトのアイデアが生まれ、進行にも多大な好影響がありました。このように、何かを成し遂げようとするときに、人のつながり、コミュニケーションがいかに大切かは、我々メンバーも実感したところです。そのつながりを基盤に、両機関は、このプロジェクトを通じてさらに人と人のつながりを創造し、深めることができました。

本研究を通じて、地域連携部会の本来の趣旨である、地域の様々な関連機関や人々とのつながりを得ることができました。保育の現場の人々、保護者の声を聞き、それを活かすことは教員や保育者養成にとって非常に大切な使命です。このプロジェクトのおかげで、誰の声を聞くべきか、どなたに教わるべきか、研究メンバーは改めて考え、アプローチしました。教育機関が地域や現場の声をよく聞いて、それを活かしてこそ、地方の高等教育機関としての存在意義が認められるのではないでしょうか。本研究の結果にはその声が表れています。調査に答えて協力してくださった皆さんに心から感謝をいたしております。今後もぜひ声を聞かせてください。

我々教育機関のつながりも深まりました。何かの時、自分たちに足りないところは相談しあうという意識が生まれたように思います。本プロジェクトメンバーの専門分野も多彩でした。研究面を中心となって取りまとめてくれたのは心理学が専門の鈴木氏でした。実証的研究を得意としていることを活かし、質問紙の作成、分析、報告書の作成まで能力を発揮してもらいました。質問項目の作成には、多くのメンバーがそれぞれの専門領域の立場からインプットをしました。研究協力者の依頼には保育現場や管轄機関とのつながりの深いメンバーが依頼に当たってくれました。質問票の配布や回収そしてこの報告書などの取りまとめにはプロジェクトスタッフが多大な労力を注いでくれました。ここに協力をしてくれたすべての方に謝意を表したいと思います。

高等教育機関には、現場や地域の人々が気付いていないけれど、実は将来大切になることなどを提示していく使命も存在すると思われます。現場と提携し、その声を活かしていくことと、新たなニーズを提示していくということ、この両方の使命を今後も果たしていくという気構えも、本プロジェクトを通じて新たにさせられたところです。本研究では、保育者の在り方として、興味関心、知識、能力に加え、人格面のニーズが高いことがわかりました。その具体的な内容に関して、どのような教育をどのようになしていくべきか、検討を進めることが今後の課題となります。

地域連携部会　小　池　浩　子（信州大学教育学部）

長野県上田市における集約的保育者養成ニーズを反映した保育者養成に関する研究
―集約的保育者養成ニーズの把握― 報告書

編集・発行　上田女子短期大学　ＧＰ推進室
〒386―1214　長野県上田市下之郷乙620
TEL：0268-38-2352
FAX：0268-38-7315

信州大学教育学部　ＧＰ事務室
〒380―8544　長野県長野市西長野６のロ
TEL：026-238-4037
FAX：026-238-4019

発行日　平成24年２月20日
印　刷　信教印刷株式会社